# TOKYO DESIGN FLOW paper

www.tokyodesignflow.com ¥100

N10 APRIL, MAY 2009 Published by MEDIA SURF COMMUNICATIONS


# FREE

# *from*

# freedom

## 本当の自由は?

10th ANNIVERSARY ISSUE

現在世界では、世界不況、地球温暖化、人口爆発、食料危機などが起き、
それに伴い経済の潮目も変わったといわれています。これらは産業革命以降、
経済を拡大し消費することが発展の原動力とされるなか、エネルギーを無限に使ってきたことの帰結です。
消費エネルギーを抑え、文化のエネルギーと創造の力で世界を変え、人々の生活を考える、
本当の人類の英知が必要な時期が来たといえます。
TOKYO DESIGN FLOWはこのような問題意識のもと、
都市の状況や人々のライフスタイルそのものをデザインの対象としてとらえ、
それらの全てのデザインを覆う傘となり、大きな流れを創り出すことを目指します。
TOKYO DESIGN FLOWは一つの事象を表すものではありません。
東京を中心にデザインを取り巻く状況を、マンスリーイベント「LAST THURSDAY」、
ウェブサイト、紙媒体などを通し情報を発信していきます。

## Design & philosophy

### 自由からの解放。
### なぜ人はお金が欲しいのだろう？
### 通貨が発明されてから人々は先ず物々交換の難題から解放された。

考えてみると、ボクの魚3匹とキミのトマトは何個が適切なのだろうか？
ボクのレモン5個とおばさんの作った布は何枚くらいが良いのかな？
値段がついていれば自由に決められる。モノだけ見てもその価値は
いくら考えても答えは決められない。欲しいものが欲しい。
此れが市場経済。東京の若者はお金があると何でもできると思っている。
少なくとも自由が得られると考えている。お金で何でも買える。買えるものが全てだ。
お金こそが自由だ。お金のない自由はないのか。
食べ物は買うものだと考えているし、働くとはお金を得る事だと思っている。
買う自由が自由だ。縛られる事がないことが自由だ。しかし
本当に何でもしていいと言われると何をしていいか解らない。
値段を決めてくれないとモノの価値が解らない。そこで此の大不況。
何も変わっていないのに、全てが崩れているそうだ。決まった給料がないと
不安が勝る、決めてくれないと自由な気持ちになれない。
お願いだから、自由だなんて言わないでくれ。自由がないと落ち着く。
縛られてこそやっと自由に生きられる。
自由から逃げるしかないのだろうか。
此れがいまの東京の自由。で、何かおかしいですか？
東京には自由が流れています ——Tokyo Design Flow

どうもー！ おなじみMATだけど、最近どう？ 調子は？ あっ、オレに聞いちゃう？ まぁ、あいかわらず絶好調だよね。そんなことより、報告があるんだ。このコーナーって『MAT. のテレフォンシリーズ』って言うんだけどさ。実は……今月で終了です！ 正直ネタ切れすれすれでやってたんだけど、編集長がどうしてもやめさせてくれなくてさ。やっと解放されたってわけ。なんたって今月のテーマは「自由」だからね。自由の身なわけですよ。そんなわけで、自由なオレと食事もどう！？　えっ、何？　このコーナーにもオレにも興味ない？ ちょっ、待っ……、ガチャッ、ツーツーツー。……やっぱり続けようかな。

MAT.

**TOKYO DESIGN FLOW**
organized by Media Surf Communications Inc.
www.mediasurf.co.jp
info@tokyodesignflow.com

**TOKYO DESIGN FLOW paper**
Publisher: Teruo Kurosaki
Producer: Akihiro Matsui
(Media Surf Communications Inc.)

Editor in chief: Daisuke Horie
(Media Surf Communications Inc.)
Editor: Kiyo, ToM, Yusuke, Osumi, Mamoru,
Moeko. (Media Surf Communications Inc.)

Art Director: Kazuhisa Yamamoto (Donny Grafiks)
for Media Surf Communications Inc.
Designer: Donny Grafiks,
Kazuyo Takaiwa, Makiko Fujiwara, Cassie

Cover Graphic: Donny Grafiks
photographer: Nobuya Aqune, Momoko
Matsuki(p12)
Supported by Ourselves.

MEDIA SURF
COMMUNICATIONS
Copyright©2009 Media Surf Communications Inc. All rights Reserved.

**FREE FROM FREEDOM**

# 本当の自由は？

**「自由」と聞いて、想像するのはどんなことでしょうか？それはきっと十人十色でしょう。**
**自分の考える自由は、他人にとっては不自由かもしれない。その逆もしかり。「自由」とは相対的なものです。**
**自由は歴史上、闘争のなかで求められてきました。**
**古くは封建制、絶対主義支配に対して革命運動を、支配に対して解放運動を起こしてきました。**
**自由という概念は倒すべき、脱するべき何かに向けられ、その先にも続きます。**
**「～からの自由」と「～への自由」。自分が夢や希望を求めた先にあるもの。**
**明治時代「Liberty」を福沢諭吉が「自らに由る」と言う意味で「自由」と訳しました。自己の精神に自由の答えがあると考えたのです。**
**しかし、自分の自由に対してビジョンが描けなければ、かえって何をしていいのかわからない不自由な状況になることもあります。**
**エーリッヒ・フロムは、著書『自由からの逃走』のなかで、自由のなかで孤独と無力感にさいなまれた大衆が、**
**他者との関係、指導者との関係を求めて全体主義を信奉することになる、と説きました。**
**「自由」は様々な顔を持ちます。それぞれに自由を感じる瞬間があります。自由でないことを嘆くこともあります。**
**自由だと思っていたことが、そうではなかったこともあるでしょう。**
**全てのヒトに共通する答えなんて見つからない、ということは分かっていますが、僕たちは「自由」が何か考えたいと思いました。**
**「本当の自由は？」。様々な自由を、都市のなかで、そして文化のなかで集め、伝えます。**
**「そんなのは自由じゃない」「それも考えてみれば自由だよな」。**
**その捉え方も「自由」です。**

# FREEDOM & LIBERTY

**「自由」を英語に置き換えると、「FREEDOM」と「LIBERTY」があります。**
**「自由」という言葉は福澤諭吉が「LIBERTY」に対して訳したものですが、現在では「FREEDOM」の訳語も「自由」となっています。**
**では「FREEDOM」と「LIBERTY」、それぞれの言葉がもつ意味は？**

## FREEDOM

freedomはもともと古代のドイツ語です。Freeの語源は、「freo」で、形容詞としてはdear（親愛な）, favored（好意を持たれている）の意味を持ち、動詞としてはlove（～を愛する）の意味で使われ、精神的な自由を表しています。

## LIBERTY

libertyはフランス語経由のラテン語です。語源は「libertas」。制度的な自由、権利としての自由を表しています。Libertyの形容詞であるliberateはliberareという、set free（解放する）を意味する動詞の派生語です。liberという部分がfreeと同じく「自由」を意味で、liberateは、その意味にate（～化する）の意味がついています。

上記の語源的な側面からFREEDOMは束縛や拘束がなく義務を免除された状態、自由の消極的側面（～からの自由、～しなくてよい）、LIBERTYは選択や行動・発言の権利が保障された状態、つまり積極的側面（～への自由、～してよろしい）が強調されます。言い換えるとFREEDOMは自己の精神における内的な自由、LIBERTYは社会との関係性における外的な自由と言うことができるかもしれません。

言論［信仰,出版］の自由　freedom of speech [faith, the press]
貿易の自由化　trade liberalization.
自由の女神　the Statue of Liberty.
自由意志　one's free will.
自由競争　free [open] competition.
自由経済　free economy.
自由裁量　a free hand.
自由市場　a free market.
自由思想　liberal ideas.
自由主義　liberalism.
自由世界　the free world.
自由貿易　free trade.
自由放任　laissez-faire; permissiveness.
『自由論』（J=S=ミル、1859）　On Liberty
『自由からの逃走』（エーリッヒ・フロム、1941）
Escape from Freedom (US)、
The Fear of Freedom (UK)
『民衆を導く自由の女神』（ウジェーヌ・ドラクロワ、1831）
Liberty Leading the People

FREE FROM FREEDOM

# FREE FROM DEATH
## 死なないための住宅

text：清田直博(Media Surf Communications Inc.)

“死”という人間の究極の制約からの解放を目指す建築が東京・三鷹にある。ニューヨーク在住のコーデノロジスト（芸術、哲学、科学の総合に向かい、その実践を推し進める創造家の意）である荒川修作が自ら発注者となり、土地を探し資金を集めて実現した「天命反転住宅」。天命反転とは人間の宿命を変えてしまうこと。すなわち死なないための住宅だ。その空間を自らの体で確かめるべく、特別に一部屋をお借りし取材した。与えられた時間は4時間、どこまで不死に近づけるか？

まずは3階へ。エレベーター中の極彩色パネルに色の洗礼を受ける。目的の部屋に到着し、ドアを開けてなかへ。床は砂場のようにコンクリートが波打つ。太陽光を受けた壁の原色が際立つ。部屋に大きな収納はなく、家財道具は天井にある無数のフックから吊るす。部屋の中心は周囲の床面より一段下がっており、縄文時代の竪穴式住居の炊事場のようだ。その周りを囲む人工大理石のテーブルは、天井にモノを吊るす時の足場にしたり、腰掛けたりするのにちょうどいい高さ。テーブル前の床は平らになっており、ここに座って食事をするとよい。ヘレン・ケラーが建築のテーマになっているというだけあって、目を閉じて歩いても手に触れる範囲内には必ず何かが配置されている。空間の使い方は自由そのもの。

印象に残ったのは球状の部屋だ。そろりと足を踏み入れるが、斜面に足を滑らせ思いっきり転ぶ。自然はいつも危険と隣り合わせだ。靴下を脱ぐ。聞こえる音が他の部屋と違う。パラボラの空間みたいなもので、すべての音が跳ね返って中心に集まる。音楽を流してみるが、イヤホンで聴いているかのよう。雨の日は不思議な雨音が楽しめるらしい。

床も壁も全てコンクリートで、そのひん

やりした触感に、子供のころ近所の公園で遊んだオーガニックフォルムのコンクリート遊具を思い出した。仰向けに寝ると本を読むのにちょうどよい。うつ伏せになると背筋が伸びて気持ちがよい。いろんな体勢になって遊んでいると、いつもは使わない筋肉を使っていることに気付く。ウトウトして寝てしまう。ハッと目が覚めると目の前は原色、一気にアタマが覚醒した。ここは人間用の動物園か？ 知らぬ間に先祖帰りさせられるような空間だった。思いのほか居心地がいい。

原色で凹凸だらけの空間は、現在もてはやされているシンプルなデザイナーズ空間とは真逆だが、一体どちらがほんとに人間らしい住処なのだろうか？ 建築学生達が崇め奉る建築雑誌のインテリア写真に人間は写っていない。このことが全てを物語っている気がする。見学会に来た

子供がはしゃぎ回り、帰りたくないと親にせがんでそのまま住み着いてしまった家族や、バリアフリーでアースカラーな無機質空間は独り身に寂しいと言う老人が住む住宅。ここでは少なくとも、心が死んでしまうことは無いだろう。

三鷹天命反転住宅　In Memory of Helen Keller
1週間からのショートステイやイベントでの利用もできます。詳しくは下記連絡先まで。
お問合せ先：株式会社 ABRF（担当：松田）
〒181-0015 東京都三鷹市大沢2-2-8
三鷹天命反転住宅101　TEL：0422-26-4966
MAIL: info@architectural-body.com
http://www.architectural-body.com/mitaka/

# 不自由の裏に自由あり

text：伊藤洋志(ナリワイ)

自由が丘という名の駅がある、これは私の最初の勤務地であった。1928年に手塚岸衛という教育者が自由主義教育を掲げて自由が丘学園を創立したのが地名の由来らしい。それはさておき、自由が丘での生活が自由だったかどうかはよくわからない。地名だけで自由を獲得することはできないようだ。

ところで、会社とノルマといえば不自由さの象徴である。事実、会社で部下をつぶす一番よい方法は「新しいことをノルマを課してやらせる」。新しいことはどうなるかわからない、そんな状況でノルマを課そうものなら不確実性と圧迫感がセットになって不自由の壁になってやってくる。不確実性と圧迫感をセットにしてはいけない。そういえばCIAやKGBなどの諜報機関の構成員は何があろうとも最終的には国家が助ける仕組みになっているらしいが、やはり不確実性の高い仕事には圧迫感を軽減しなければならないのだろう。新しいことは1達成で祝杯をあげ、10達成でまた祝杯をあげてと、登っていくしかない。未知のゾーンでいきなり1000目標だ！などとやろうものなら、せっかく100達成してもガッカリするだけである。わざわざガッカリを増やしても仕方がない。逆に、既知のものでノルマを課さなければ、人間はたいていサボるのでだんだん緊張感がなくなってしまう。かようにノルマ一つとっても、状況によっては適度な緊張感が自由を生み出すこともあれば、不自由の原因になることもある。最近、自由、創造性、自主性などを標榜した教育の方法論が出てきている、いいことであると思うが、それではロックンロールミュージックが生まれないのではないか、それが心配だ。

日本では自由という言葉はもともとなかった。それは何が理由かはわからない。わからないが、江戸時代には、士農工商と職業が決められていた。これは不自由だと思うが、思うのは、われわれ現代人の勝手な見方であって、何でもいいよという現代のほうが、何をしていいか決められなくて、実はこまったもんだということもある。君は農！君は商！と決めてもらったほうが、そのなかで何ができるかに集中できるという側面もあろうし、士農工商がうまく調和する割合を保てていたのかもしれない。いまは士（公務員）や商（金融・コンサル）が多すぎると思う。とはいえ、士農工商時代のほうが自由かというと、既に選べることを知っているわれわれにとっては、もう自由とは言いがたい。いま必要なのは、士農工商でも、いまの儲かればなんでもあり、とも違う新しい自由をつくるという個々の創意工夫ではないか。現代において自由を獲得するには、衣食住のみならずさまざまなジャンルでの自由を再検討する必要があると思う。

私事で恐縮だが、かの自由が丘にてやるべきことをやり終えて退職した翌日の景色は、幻覚ではないかと思うほど輝いて見えた。自由は不自由をへて実感される。いつも自由は既にあるものではなく、そのつど獲得していくものなのだろう。

住の自由のための実験として、庭に立てた折りたたみゲル。不動産コストフリーのゲルカフェも構想中。

Hiroshi Ito
遊びと一体化した仕事つくる集団ナリワイの代表や農業ウェブマガジンザックザックの編集長をしております。最近は、住の自由ということで移動式住居の研究のために折りたたみ次世代ゲルの研究をはじめました。

## 『民衆を導く自由の女神』(1830)
## Ferdinand Victor Eugène Delacroix

“自由”を表した代表的な絵画として『民衆を導く自由の女神』があります。フランスを代表する19世紀ロマン主義の画家・ドラクロワによって描かれたこの絵は1830年7月で起こったフランス7月革命を題材にしています。この革命は優遇される特権階級への不満が噴出し、市民であるブルジョワジーが反乱を起こしたもので、この革命のインパクトはヨーロッパ中に伝播しました。そして、この革命では富めるブルジョワジーの不満は解消しましたが、今度は労働者や農民が不満を爆発させるようになります。状況が変われば、新しい自由を求める闘争が生まれます。それは現代でも変わらないと言えるのではないでしょうか。ちなみに『民衆を導く自由の女神』の原題は「La Liberté guidant le peuple」。英語にすると「Liberty Leading the People」。ニューヨークにある自由の女神の正式名称は「Liberty Enlightning the World」。自由は人々を導き、世界を照らします。だからこそ自由の意味をはき違えてはいけないのではないでしょうか。

FREE FROM FREEDOM

# チャリのフロウ 第6回 <自由篇>

## 埼玉の山奥に自転車仙人がいた！

text: 清田直博(Media Surf Communications inc.)

工場の主、荒井正さん。少年時代より自転車に熱中し、自転車を作り続けて数十年。荒井さんより自転車に詳しい日本人はほとんどいない。

「自由な生活を送りたい」と誰もが一度は願ったことがあるのでは？ だけど自由ってなんだろう？ いくら自由に使えるお金があっても、モノを買うだけで人生が満たされるとは思えないし、何をやってもいいよと言われても、情熱を注げる何かが無ければただ退屈で不毛な人生になってしまうだろう。もし一つの道に没頭し追求し、それで適度にお金が回ればとても自由でハッピーなことだ。そんな「自由」を自転車づくりを通して実践している人が埼玉の山中にいます。

その人の名は荒井正さん。昭和のサイクリングブームで一世を風靡した今は無き自転車メーカー「片倉自転車工業（片倉シルク）」から数々の名車を世に送り出し、2005年にはその「シルク」を復活させた人です。今日も埼玉は鳩山にある工場で、日々自転車づくりをしています。

「仙人状態で山に籠って好きな事やっていければいいかなと思ってたけど、やんなきゃいけないことが見つかったんだよ」

モノがどのようにして作られ、どんな仕組みで動いているかなんて知らなくてもどうにかなってしまうご時世。自転車修理もお金を渡して人任せ、そんな時代に反旗を翻し、服を作ったりパン焼いたりするのと同じように、自転車づくりを人の手のなかに取り戻そう。エコブームと不景気を追い風に、極秘プロジェクトを進行中です。

現在開発中の26インチ折り畳み自転車。折り畳み自転車の名作「GIANT MR-4」を設計したウワサの日本人が荒井さんです。

雨水タンク。
工場には水道を通してないのでこれを利用。

初期自転車レースの写真。「オーディナリー」という型の自転車。当時の自転車レースはお金持ちの娯楽で、あのツールドフランスは金持ちたちが使用人のタフさを競うためにできたらしい。

なんで自転車なのに「絹」なの？ 「シルク」という名前の由来はフレームに絹成分が入っているわけではなく、片倉シルクの親会社「片倉工業」が製糸会社だったから。あの富岡製糸場を操業していた会社です。

初の国産レーサー車が出場した1964年の東京オリンピック。日本企業が何社か開発に挑んだが、競技で使用されたのは「片倉シルク号」だけであった。自転車の名前に「号」が付くところになんとも時代を感じる。そういえば仮面ライダーのバイクは「サイクロン号」だったなあ。

オリジナルフレームを製作中。 昔は日本でもこうやってハンドメイドで自転車はつくられていました。オーダーメイドフレームの相談もOKです。

ほんとに山のなかにあります。敷地内の林にツリーハウスを建てようかという話も。

絹自転車製作所　Silk Bicycle Factory
埼玉県比企郡鳩山町石坂1414
http://silkcycle.com/

# YACE interview

**フランスでバスケットボールのプロ選手として活躍し、現在は「Hype Means Nothing」デザイナーとして活躍するYACE。**
**興味の対象に決まりはなく、デザインにおいても、バスケットにおいても自由にクリエイティビティを発揮している彼にインタビューした。**

interview: MAT. (Media Surf Communications Inc.)　translation: 長谷川守(TOKYO DESIGN FLOW)

**あなたのクリエイティブな側面に影響を与えているものは何でしょうか？ 例えば、フィリップ・スタルクは飛行機の設計士だったお父さんの影響を存分に受けて自分のデザインに生かしています。**

僕は今25歳で新しいルールを持った世代の人間なんだ。バスケットボールのがさつでわんぱくな面も好きだし、逆に洒落ていて上品な面も両方持ち合わせているんだ。そんな新しいタイプの中心的存在になりたいと思っているよ。僕は漫画も読むし、ゲームもやるし。高いスーツだって好んで着るし、時にはスウェットパンツで出かけちゃったりもする。全く違ういろんな自分を全部合わせたのが僕なんだ。

**あなたはデザイナーでもあるし、バスケットでもプロとして活躍していた経歴があります。**

僕にとってバスケは人生の全く違うパートなんだ。9歳から始めて、ずっとやってきて去年はプロとしてやっていた。バスケは人生のほとんど全てといってもいいね。だから、僕には2つの異なる愛着がある。デザインも好きだけど、バスケと両方を一緒に考えたことはないんだ。

**建築やインテリアデザインなどの空間デザインもするんですか？**

僕はいろんなことがやりたい。例えば服を作ったり、携帯オーディオも作る。どんなことでも全てクリエイティビティに変わりはないと思っていて、限られた世界に閉じこもるのは嫌なんだ。空間デザインなどは僕の専門ではないけど、クリエイティビティに変わりはない。是非やってみたいと思っているよ。勉強したからってどうっていうものではないと思うな。

**残念ながら日本の社会では学校でしっかり勉強した人が認められて仕事に就けるというようなシステムになっています。フランスはどうですか？**

多少はマシかも知れないけど基本的には同じような状態だね。僕は大学院を出てるんけど、コマーシャルビジネスが専攻でデザインとはまったく関係ない勉強をしてた。でも本当にやりたいことをするために自分で会社をつくったんだ。友達や同僚と一緒に1から10まで全部自分たちでこなすんだ。アイディアはどんどん沸いて出てくるけど問題はお金がないことだよね。

**それは日本で活動する僕らも一緒です。出版だって、イベントやるにしたって必ずお金が必要です。なんとかしなきゃいけないんだけど、神様から与えられる試練みたいなもので、本当に打ち込めるのか、それともただの冷やかしか、そこで決まります。**

ファッションにしろ音楽にしろ流行なんてせいぜい5、6年しかもたない、またすぐ新しいものがどんどん出てくるんだからね、大体いつもそんな調子。僕はそういったところとは違う目線からものを見るのが好きなんだ。

**最後の質問だけど、この先成功してもバスケは続けますか？**

バスケットが無い人生なんて考えられない。どこに行ってもまず真っ先に探すのはバスケットコートなんだ。人と出会う場所としても最高だしね。

YACE
アパレルブランド「Hype Means Nothing」デザイナー。世界のセレブリティが手で眼鏡を作った顔を胸に配したT-SHIRTがパリ「collette」で大ヒット。フランスでプロバスケットボール選手としても活躍していた。
http://www.hypemeansnothing.com/

# 桜の森の満開のミサイル

text：草彅洋平(東京ピストル)

先日桜の満開の下、花見をした時のことだ。原宿駅は大変な賑わいで、代々木公園に行くのにも20分ほどかかる。携帯はつながらず、友人も人ごみに紛れて見つからない。僕は買って来た缶ビールを空けて、友だちが見つけてくれるしばらくの間一人で桜と空を眺めていた。折しもその日は北朝鮮のテポドンの発射の日。そんな日に桜の花びら舞い散るなかで、だれもが陽気に一杯やっている姿は、これからやってくるかもしれない大惨事にイメージを照らし合わせると、どこか感動的にすら僕には思えた。日本は、本当にピースフルで美しい国だとつくづく感じられたのだ。

例えば日本の総理大臣の支持率が伸び悩む。経済もいきづまる。政権交代の危機もある。そうした状態で、隣国が好戦的な状態でいるのであれば、それを迎撃、一気に戦争へというシナリオも考えやすいものだ。今まさにそうした状態で、麻生政権が仮に迎撃したとすれば、世論の流れは一気に戦争一色となり、この世の不況や政治不安なども一掃、一発逆転のホームランとなる可能性もはらむだろう。だが、そうした危機を平和的に受け流した日本政府の柔らかさは、やっぱり日本人的らしくいい。暴力で解決するよりも、話し合い、建設的に向き合っていく。草食系という言葉が世間ではもてはやされているが、僕らは単にピース系なのだ。

いま出口の見えない不況の世の中で、だれもが漠然とした不安を抱えながら生きている。テクノロジー的にもゴールが見えず、何をやればいいのか、何をすべきなのか、日本政府を含め、だれもが明確に指し示せないでいる。テポドンという言葉で嬉々としたように、どこかでこの世の破綻を望んでいるような心もどこかにないわけではない。僕も未来が見えないし、今後の先行きも不安である。だが、本来見えない未来を見えたつもりになっているのがそもそも間違っていたのではないだろうか？　自分なりにできることを一歩ずつやっていく、誠実に生きようと日々考えている。それだけで人間は幸せなのではないか？

日本は、東京はピースで自由である。そのなんと素晴らしきことか！

春の到来とともに、株価も徐々にあがってきた。株価なんて僕にはまったく関係ないが、経済が破綻しようと回復しようと、日本人がこれからもピースで自由であり続ける人々であることを切に願いたい。

Yohei Kusanagi
「東京ピストル」代表。編集者。東京ピストルとして数多くのデザイン製作にも従事している。鈴木宗男をDJ＆ラッパーとしてクラブに招き、クラブをつぶした伝説的なクラブイベント「ムネオナイト」の主催者でもある。現在ビートニクと拮抗するニートニク運動を起こすべく、無職団体「ニートニク」を構想中。
http://neetnik.tumblr.com/

FREE FROM FREEDOM

# OUT OF STEP

## 自己制約から生まれる自由

text: 田邊慎太郎

先日、僕の友人宅である本を見せられた。70～90年代半ばまでのアメリカ東海岸のハードコアシーンを中心に扱った「Radio Silence」という本だ。それは偶然にも僕がアメリカで一緒に仕事をしていた同僚が作ったもので、以前からこのような内容のものを作っているという話は聞いていたが、実際に手に取って見たのはこの時が初めてだった。
“ハードコア”という音楽が説明されるとき、「ストレートエッジ」という思想がよく例としてあげられる。ドラッグや酒などを断ち、よりストイックに音楽に傾向する考えだ。それは印象として、一般的によく使われる「音楽と自由」という関係性からはほど遠いように感じるかもしれないが、一方で自由というものはその基準にあるような気がする。

何でもいい、何をしてもいいという自由ではなく、自分なりの心地よさや解放感を得るための秩序のある不自由さ。それは、他人に束縛されたり価値観を押し付けられたりする時の窮屈さから解放されたいと感じることからではなく、自分が素直に「良い」、もしくは「かっこいい」と感じるものを求め、またそれに対してブレずにいたいと思う気持ちから生まれてくるものなのかもしれない。一見、決めごとがあるというのは不自由そうに思えるけれど、逆に秩序を持つことによって得られる不自由さからにも自由が存在する。

この本、そしてハードコアという音楽からそういった自由の形もあるかのように感じた。多様化して混沌とした時代、僕が普段生きていて何気なく使う言葉「自由」。「自由」は深く考えていくことでこそ、自分にとっての意味を成し、価値あるものになるのではないだろうか？と改めて自分なりの自由の意味を好きな音楽から考えてみようと思った。

Shintaro Tanabe
JDK、WKを経て、現在フリーとして活動。

# Free Music Travel

## ラップの起源からPrefuse73の動向まで

text: 大隅祐輔(TOKYO DESIGN FLOW)

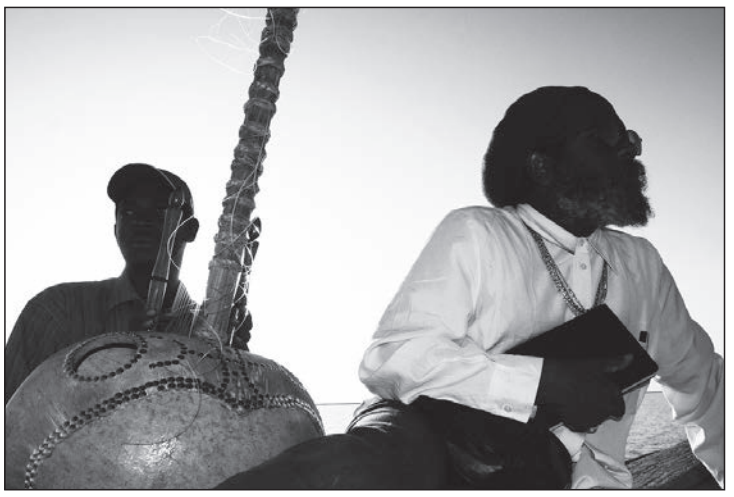
前号ではブロックパーティー、コディー•チェズナット、ブラックミュージックを中心に記事を書きました。今回は時間を一気に遡り、「グリオ」と呼ばれるアフリカの職業音楽家について紹介します。

マルコムXの演説などとともにグリオが歌う唄はラップの起源と言われています。元々は音楽としてではなく、過去の英雄、情報の伝達、家系などを世襲によって伝えるための旋律を利用したコミュニケーションツールでした。そのため、ある家系は豊富な知識量から王の側近に任命される人がいたほど大きな役割を担っていました。僕個人がグリオの演奏を動画で随分と前に見て、感動を覚えた記憶があります。
「コラ」と呼ばれる21本の弦で構成された弦楽器と「サバール」というジャンベのような打楽器。コラから紡ぎだされる音像は非常に流麗で、シタールのような音色にスパニッシュギターを足し合わせたような音色が流れます。この「コラ」は形状として元来、僕たちが慣れ親しんでいる弦楽器の形を持っていないことが驚きで、ギターでいうアルペジオを両方の親指と人差し指で爪弾きます。そして、グリオの役割や世襲制という条件から、一般人が手に取り、演奏するということは稀な楽器であるために、一般的な普及がなされず、神聖なものとして扱われてきました。

なぜ、僕が今回グリオを取り上げようと思ったのか。楽譜という制約は一切なく、一貫して非常にミニマルに繰り返される音が特徴であり、その演奏形式は自由。座って弾いている一方で、コラを抱え踊りながら演奏することもあります。絶対テキトーだろ！と思ってしまうくらいに柔軟にリズムに乗せられていくライム（?）も含め、音楽は場所も時間も形式も自由だと感じさせられてしまうほど、繰り返される音像が僕にとってあまりにも衝撃的でした。

コラを演奏するグリオ

話は少し変わり、最近「Prefuse 73」ことスコット•ヘレンの活動が異常なまでに活発です。彼はヒップホップという枠を飛び越え、CDや楽曲というさまざまなフェーズでそれぞれに違った顔を見せます。そこには純粋に音楽を楽しむということ以外に、選択の自由という音楽に対する広大な許容範囲が彼の楽曲から直接伝わってきます。あらゆる楽器を自由に選択し、巧みな使用で未知な世界を切り開く。
音楽を聴くことに関しても選択の自由は必ずあると思います。今では自由な音楽というテーマで簡単に時代を遡って考えることができてしまうくらい、さまざまな情報が転がっています。自由なMusic Travelを楽しみましょう。



先日発売されたPrefuse73のアルバム『Everything She touched Turned Ampexian』。今回はサイケデリックな音同様。ジャケットにもプログレバンド風のデザインが施されている。

# MR FREE interview

## “自由”を名前に持つミュージシャン「MR FREE」にインタビュー。

interview: MAT.(Media Surf Communications Inc.)　translation: 大澤萌子(TOKYO DESIGN FLOW)

**出身はどちらですか？**

ニューヨーク出身ですが、アメリカ国内だけじゃなく、世界中いろんなところに住んでいました。わりと長い間、教師をしていて、ヴァージニアとカリフォルニアの中学と高校で歴史と数学を教えていたんです。

**音楽に本格的に取り組むようになったきっかけは？**

数年前、2000年くらいかな。「Cree」というロックバンドに出会いました。ある時、かれらは私にフリースタイルをやるように言ってきたんです。そこでフリースタイルをしたのですが、その後かれらは私に「君には天性の才能がある」って言ったんです。「いまはまだ世界があなたに気付いていないだけだ」って自信たっぷりに。その言葉が私に自身を与えて、真剣に音楽、そしてヒップホップに対して真剣に向き合おうと決意したんです。

**あなたは先生でもあるし、音楽もやっているし、そしてバスケットもかなりの腕前と聞きました。**

バスケットは、いつも新しいコミュニティの始まりになります。知らない人でも距離が縮まってフレンドシップを築くことができるし、その人がどんな人なのかっていう本当の人格が分かったりします。

**どうして自分を「MR FREE」と名付けたんですか？**

実は私の本名はジェフリー（Jeffrey）っていうんです。この話の始まりはすごく面白くて、以前父のオフィスで働いていた時、私は自分のことをジェフって呼んでいたんです。父は本当に面白い人で、「なんで自分のことジェフって呼ぶんだ？ それじゃあ（本当の名前に）足りてないぞ」私は「そんなのは私の自由じゃないか」って。でもその瞬間ピンときたんです。すごくいいこと思いついた！って。

それから少し経って「MR FREE」を名乗るようになって、教師をしていた時も「MR FREE」として教えていました。「MR FREE」を名乗ったことは私自身の物の見方を変えました。たくさんのアメリカ人男性はそれぞれの人生のステージにたどり着いた時、彼らがこのために生まれたんだと感じた時に名前を変えることがあります。

**あなたは“自由”を手に入れたんですね。あなたの名前、ジェフリーから。**

そう、私も名前を変えて「from a boy became a man」となったんです。

MR FREE
現在、日本で活動しているミュージシャン。これまでアルバム「LAY UP LINES」「WRITES OF PASSAGE」を発表している。http://www.myspace.com/mrfree

FREE FROM FREEDOM

# 自由な農的生活を目指して

## 古都・鎌倉へ行ってきた

text: 田中佑資(TOKYO DESIGN FLOW)

**先月は「東京にも自給自足できるものがある」「食べられる自然が残っている」なんてことを考えて、公園の野草を食べてみました。食べられなくはなかったです。でも、あまり気持ちのよいものではなかったのが正直な感想……。やっぱり、都市は都市らしいやり方を見つけなくてはいけません。新たなヒントを求めて、自然と伝統、そして新しい価値観が共存する古都・鎌倉へ行ってきました。**

鎌倉には海があり、山がある。古くから住んでいる人がいて、文化を求めて新しく入ってくる人もいる。大仏さんもいらっしゃる。それらのミックスが、自由な文化を生んでいます。今回の旅で見つけた、農的生活を実践している人々とその働き方を、ご紹介！

**1. 攻めのクリエイティブ農業マガジン ザックザック**

鎌倉に本社をかまえるIT企業、面白法人カヤック。「つくる人をふやす」ことを経営理念として、ユニークな取り組みを続けているカヤック。実は去年から、ITで農業と人をつなげる「攻めのクリエイティブ農業マガジン ザックザック(www.zackzack.jp)」をはじめています。

ワニを養殖してワニ肉の販売をしている農家さんや、島に一人で自給自足しているおじいさんなど、クリエイティブに農業とかかわる人を紹介中。今後は「ちょっと農業をはじめてみたい」「気軽に自然と関わりたい」といった人を対象にしたコンテンツも企画中。TOKYO DESIGN FLOWともコラボレーションしましょうと意気投合しました。乞うご期待！

**2. “食べられるジャングル”をつくるデザイナー**

カヤックを離れたあとは、鎌倉の市場の中にあるパン屋PARADISE ALLEYへ。オーナーで鎌倉生まれ鎌倉育ちの順平さんに案内してもらい、鎌倉山に住むデービットさんの家へ連れていってもらいました。デービットさんは生意気(www.namaiki.com)というデザインユニットで活躍しており、いまは自然を相手に遊びまくっています。なかでも種をまくだけでたくさん生えてくる多年草に夢中。Farmer's Marketの話をすると、「売るのはもうイイヤ」「野菜は育てるのが大変」「多年草が繁っているこの庭は“食べられるジャングル”」などなど、自由な言葉が溢れてきました。流石です。

カヤック鎌倉本社はクライン・ダイサム・アーキテクツによるデザイン

生い茂るフキ(左)とハマダイコン(右)

食べられるジャングルの奥には海が見えて絶景

**3. 鎌倉の有機農家さん**

1時間ほどのんびりしたところで、近くで有機農業をされている方のところへ。茅ヶ崎でパーマカルチャーを実践されている熊澤さんに連絡をとったところ、紹介していただけました。ニンジン畑に生えてきた雑草をむしりながらしばし雑談。雑草をプチプチしながら話すととても気持ちが良いです。

決して大きくない畑で約40件の会員さんに毎週野菜を供給中。

驚いたのは、「何種類も農薬の使い方を覚えなきゃ行けない慣行農法のほうがよっぽど大変だ」とおっしゃったこと。なるほど、そんな考え方もあるんですね。湘南地域は住んでいる人の食への意識が高く、有機野菜を求めて買ってくれるので、有機農業をやるには向いているみたいです。地産地消ができるのは理想ですね。でも地価が高いので、新規参入は難しいかもしれません。その土地によって農業にもいろんなモデルが考えられるのですね。

都市での農的生活も、いろんな道がありそうです。

＊パーマカルチャーとは？ → パーマネント(permanent＝永久の)とアグリカルチャー(agriculture＝農業)をかけあわせた造語で、人間にとって持続可能な環境をつくるためのデザイン体系のこと。

# 土地は誰のものか？

## 土地を巡る自由と平等の対立と、日本農業の来し方行く末

text:　萱原正嗣(カヤハラマサツグ)

毎月の家賃がバカにならない。だからと言って、家やマンションを買うにしても、ローンで払うコストの総額は賃貸と大して変わらない。違いは、お金を出した結果、その土地（不動産）が自分のものになるか、ならないかだ。

資本主義諸国では、土地（不動産）はモノ(動産)と同様、私有するものだ。いわゆる財産権は、経済的自由権の中核を成し、革命で流した幾多の血と引き換えに、人類が歴史の中で勝ち得た侵すことのできない権利の一つとして、多くの国の憲法で保障されている。

「土地は誰かのもの」というのは、考えてみれば不思議なことだ。数百万年前に人類の祖先が誕生したときには、地球上の全ての土地は、明らかに誰のものでもなかった。フランスの哲学者ルソーが、著書『人間不平等起源論』の中で、「土地の私有が人類の不平等を生むきっかけになった」という趣旨のことを語っている。土地の所有が自由や平等と深く関わっていること、自由と平等には相容れない性質があることを示しているように思う。そのことは、現実の土地制度からも見ることができる。

日本では、大化の改新（645年）により公地公民制が導入された。それまで豪族たちが土地と人民を支配していたのを禁止して、土地と人民は天皇（公）のものとし、公有の土地は人民に平等に貸与された。当時唯一の生産手段である土地を社会全体で有するこの仕組みは、言うなれば共産制だ。だが、その後の三世一身法(723年)、墾田永年私財法(743年)によって、土地は再び私有の対象となり、貴族や寺社が権力・財力にものを言わせて土地と人民を抱え込むようになる。土地と人民の支配者がいつしか武士へ変わるなど、変化はあったものの、持てる者がますます富む時代が長く続いた。

天下を統一した豊臣秀吉が、その流れに楔を打ち込んだ。秀吉は太閤検地を実施し、土地を公のものとして複雑に入り組んだ土地所有関係を一掃するとともに、農民が土地を耕す権利を認めた。徳川幕府もこの流れを継承し、タテマエの上では土地の平等な分配が保たれていたが、実態としては年貢を納められずに土地から逃れる農民も多く、有力な地主に土地が集中していった。

明治に入ると、地租改正（1873年）で近代的な土地制度が確立され、天皇でも幕府でも藩主でもなく、個人が土地を所有できるようになった。そういう意味では、地租改正には土地の平等な分配という側面もあったが、個人による土地の私有・売買が認められたため、持てる者が地位や財力を使って土地を次々と手に入れて大地主になっていった。そして、第二次大戦後の農地解放（1947年）では、大地主が解体され、土地が小作人に再分配されることとなった。

このように見てくると、土地を巡る日本の歴史の流れは、土地の公有（共産・平等な分配）と、土地の私有（自由・大土地所有）との間を行きつ戻りつしているのが分かる。だとすると、次に来るのは大土地所有に向かう流れだろうか。

事実、「農地解放は零細農家を大量に生み出すきっかけになった」と、零細農業を克服し、欧米並みに大規模化・効率化した工業型農業へ移行する必要性を主張する専門家もいる。だが一方で、欧米型の大規模農業は、大量の農薬、化学肥料と水を必要とし、環境保全や安全性、持続性の観点から将来性に疑問を投げかける識者がいるのも事実だ。

「土地は誰のものでもない」時代に戻ることは現実的ではない。共産制は多くの人々が理想としてきたが、その理想がそのまま現実になったことはない。となると、家賃もローンも出来れば避けたいけれども、「土地は誰かのもの」という現実を受け入れざるを得ないように思う。とはいえ、食べねば生きていけないから、食べること、すなわち農と土地の問題を自分のこととして考え、土地の私有から生まれる不平等にも、どうにかして立ち向かっていきたいものだ、と思っている。

Masatsugu Kayahara
もの書きの傍ら企画・編集にも携わる。昭和51年生まれ。京都大学法学部卒。IT企業に就職するも8年で脱サラ。現在は環境、農業、仕事(働き方)について筆を執る日々を過ごす。
http://kayamasa.blog59.fc2.com/

FREE FROM FREEDOM

# 自由大学
## FREEDOM UNIVERSITY
### 大きく学び、自由に生きろ！

text: 林篤志

昔から昆虫採集や魚釣りが大好きだった。子供の頃は、暇があれば網や生き物をいれる容器を持って、外を駆けずり回っていた。その経験は僕という人間の中核を形成していると言ってもいいぐらいだ。そこには、自然があり、地域に住んでいる親以外の大人たちがたくさんいた。本当に多くのことを彼らから僕は学んだ。学ぶのは、学校の教師や教授からだけではない。むしろ、生きていくためのスキルの大半は、学校でよりも僕がこれまで出会ってきた多くの人から学んだように思える。

人はそれぞれ「自分」という世界を持っている。バランスのとれたきれいなものもあれば、いびつなものもある。人々が集まり、そこにまた世界ができる。大小様々な世界が集まり、社会という大きな世界が形成されていく。今の社会を形成している家族、地域、学校、会社などは柔軟性を失い、収束していくばかりで、そんな世界からは、小さな「自分」の持ち主しか生まれない。大学もそんな小さな世界の一つになってしまっているのでは、と僕は思っている。

同じ年齢層の学生に、教授、決まりきったカリキュラム。日本では学術研究および教育の最高機関と定められているが、大学とは一体何なのだろう。大学の起源を調べてみると、「11世紀にイタリアのボローニャで始まり、貿易で富を得た商人が、より自由に生きるために賢者を招いて始まった」とある。現存する大学とは異なり、自分から知りたい事を聞き、自由な人生の為の自由に学ぶ場、本来の大学の姿がそこにある。

僕たちが5月から始める自由大学も、それを理念として真実を求めていく。自由に、理想の生き方を追求する、そんな大学をつくっていく。教えたいという意思のある人がテーマを出して、講義をする。それに参加して、学びたいという人が集まってくる。「誰もが自由に学び、自由に教える」その流れを作っていく、それが僕たちの仕事だ。教えたい、学びたいという意思を持った老若男女が集まり、かつての社会が持っていた大きな世界を自由大学を中心に拓いていきたい。

Atsushi Hayashi
「自由大学」運営企画及び理事。7月から世界一周の旅にでる。ブログ www.atsushih.com

Schooling-Pad
FREEDOM UNIVERSITY
@ IID GREEN CAMPUS

# Creative Commons
## ウェブが生んだ“権利”と“自由”の再構築

interview & text: 田中佑資(TOKYO DESIGN FLOW)

**ITの発達により、情報の流れが変わった。と同時に、表現の世界が変わった。表現者の“権利”と“自由”を再構築する「Creative Commons Japan」理事ドミニク・チェン氏にインタビュー。クリエイティビティを解放せよ。**

**Creative Commons(以下CC)の活動について簡単に教えていただけますか？**

CCは、ひとつの作品に対する柔軟な著作権を定義するライセンスシステムを提供しています。従来型の著作権では、「作品を使用するのにいちいち許可を求めるか」、または「全く著作権を放棄して自由に使ってもらうか」の二通りの選択肢しかありません。この“0か1か”の中間を埋める新しいライセンスシステムを提案しています。

**それは創作や表現に関する“権利”と“自由”の拡張ですね。**

はい。CCが目指しているFREE”には、2つの見方があります。CCライセンスで公開されているコンテンツは無料で利用可能なものが多いため、FREE=無料という理解もされていますが、もっと重要な意味としては、コンテンツを過剰な権利から解放するという意味でのFREE=自由を指しています。

CCライセンスで公開されたコンテンツがあることによって、「有料で手が出ない」「利用したいけど、誰に許可をとればいいのかわからない」ということがなくなり、様々な人が自由にCCライセンスのコンテンツにアクセスできるようになります。すると、これまで生まれ得なかった作品と人、人と人との関係が生まれて、新しい作品が生まれていきます。

**CCがいま眠っている創造性の解放にもつながるということですか？**

何かを作るときや表現するときに、全くの無から新しいものを生み出すケースはないといっていいでしょう。赤ちゃんの学習プロセスを見るとわかりますが、人間は「真似をする」という基礎があってはじめて、独自のものを生み出すことができますよね。ということは結局、人が考えたりつくったりするものは、いろんな人やモノの関係性の連鎖だと捉えられると思います。そもそも、人間そのものも両親のリミックスですから（笑）。だから、柔軟なシステムでこれまでになかった作品同士の関係をつくれるCCは、創造性の解放につながると考えています。

**今の課題はなんですか？**

2004年から日本でのCreative Commonsの活動が始まって、今年で6年目になります。今までが第一フェーズで体制づくりの時期だとしたら、今は認知度を高めていく段階です。CCが日常に溶け込んで、より自由な文化をつくっていく。そのために、まだまだ時間はかかりますが、ウェブ・教育・建築など、さまざまなプロジェクトで一般にCCを普及させていきたいと思います。クリエイティブなお仕事に関わられている読者の方々にもぜひ、CCライセンスを使っていただきたいですね。

ドミニク・チェン
1981年、東京生まれ。クリエイティブ・コモンズ・ジャパン理事。2008年4月に株式会社ディヴィデュアルを共同設立、現在はウェブサービス「ヘコむを楽しむ『リグレト』」のコミュニティ運営に従事。

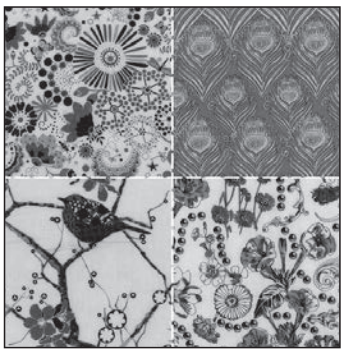
Creative Commons
クリエイティブ・コモンズのライセンスは、完全な著作権保持と完全な著作権放棄の間の中間層を埋める役割を果たします。具体的には、コンテンツに対して著作権を保持しながら一定の自由を事前に許諾している事を、誰にとってもわかりやすく表示することでより自由な著作権ルールを実現し、より豊かな情報流通と文化・科学技術の発展をサポートします。
http://creativecommons.jp/

リグレト特設サイト「勇気をくれたあなたに！「ありがとう」の言葉」 http://rigureto.jp/thanks/

# “LIBERTY”なファブリック

text: 堀江大祐(Media Surf Communications Inc.)

「リバティプリント」という有名な生地があります。細かく繊細な花模様のこの生地の名は現在一般名詞化し広く流布しています。この生地を生み出しのがアーサー・ラセンビィ・リバティ（Arthur Lasenby LIBERTY）。1843年バッキンガムシャーのチェシャムで生まれたリバティは1875年に東洋の装飾品、ファブリック、美術品などを販売する店をロンドンのリージェント・ストリートにオープンしました。そして、これがリバティ商会、現在のリバティ社の始まりです。



オープンしてまもなく、事業は軌道に乗り、1880年代に入ると自社でのファブリックの生産を手掛けるようになります。そこから生み出される上質なプリントはイギリス国内のみならず海外から、そしてアーティストからも支持されるようになります。初期には東洋の影響を強く受け、インドのカシミール地方に古くからあったパターンのペイズリーの柄などをアレンジしてプリントに使用し、さらには日本の着物の柄をヒントにしたようなものも多くありました。

そして、ウィリアム・モリスをはじめとする当時のイギリスのトップデザイナーたちとの交流を深め、日本での「民芸運動」を主導した柳宗悦にも影響を与えた「アーツ・アンド・クラフツ運動」や「アール・ヌーヴォー」といった19世紀末のデザインムーブメントに多大な影響を与え、その中心的存在となりました。

1920年代には今も人々を魅了し続ける「リバティプリント」が誕生します。絹のような光沢、柔らかい肌触り、そして値段が安いことで話題を呼びました。小さい繊細な花柄はかなりの人気を集め、いつしかリバティには花柄のイメージが定着し一般名詞として認識されるほどになりました。実際はほかに、風景、昆虫、アクセサリーなど様々な柄も存在します。

2006年にリニューアルオープンしたリージェント・ストリートの「リバティ百貨店」は今もファッションの中心の一つであり、世界のトップデザイナーに愛されています。「LIBERTY」を名に持つ一人の青年が100年以上前に始めた事業が多大な影響力を持ち続けていること。その理由はクラシックへのリスペクトだけではなく、アーサー・ラセンビィ・リバティがファッションやライフスタイルに対して描いていたビジョンが魅力的だったからこそではないでしょうか。生み出されるもの全ての総体から、言葉にはできずとも感じることができること。もし創業当時の彼にインタビューできたならば、きっと人気を保ち続けている理由を納得させる夢や希望を話してくれる。そんな気がします。

FREE FROM FREEDOM

# “FREE” PAPER

## 自由の代償

text:清田直博（Media Surf Communications Inc.）

いま東京の至る所で目にするフリーペーパー。出版不況が叫ばれるなかでどんどん増殖中。日本生活情報誌協会（JAFNA）によると、新規創刊数は年間200誌を超えるらしい。なんでこんなに増えているのか？

まずは紙メディアの流れを考えてみる。他者への興味と世の中の出来事を知りたい、それは人間の根源的な欲求だ。情報の媒体となる紙が高価な時代には、旅人や行商から自分の知らない世界を伝え聞き、江戸時代には瓦版が出現、やがて新聞に発展し、そしてそのネタを週刊誌が掘り下げはじめる。そしてニュース以外の趣味趣向性の高い記事を載せた雑誌が出現し、その読者をターゲットにした広告を大量に集めて雑誌ブームを迎える。しかし、21世紀になると紙メディアはインターネットと広告を奪い合い、最近では雑誌の休刊廃刊ラッシュ。そこで広告の費用対効果の高さを売りにしたフリーペーパー・マガジンが盛り上がってきた。ネットに対抗する新たな広告媒体として新規参入する企業が増えているのだ。タダで手に入る雑誌。無料だからフリー。

しかし世の中タダより高いものはない。通勤電車のなかで、広告と広告の間に挟まれたフリーペーパーの記事を読み、電車のなかには吊り革から吊り広告、電車を降りると駅貼りポスター、自宅のテレビで流れ続けるCM、パソコンを開くとブラウザの脇にはバナーがちらつく。現代人は常に広告に包囲されつつ、それらを受け入れ、自分の時間と商品購買という代償を払うことで、無料で情報を入手しているのだ。

そしてフリーペーパーはこのような広告と、読者、作り手というジャンケン構造のなかで成り立っている。作り手はこの制約の中で、のたうち回りながらフリーペーパーを毎号産み落としていく。しかしこのジャンケンからフワリと解放されたフリーペーパーもなかにはある。広告が少ない、もしくは全く無いフリーペーパー。クリエイティブマインドとDIY精神の過剰放出の末に発生した、一見すると採算度外視なフリーペーパーに時々出会う。そんなフリーペーパーには作り手の覚悟と重みを感じる。あるいは志の高いスポンサーの存在を。自由には代償が必要だ。たまに肩透かしを喰らうこともあるが、大抵のものは誌面に溢れる初期衝動と情熱、自由な空気を感じることができる。

タダで、気軽に、便利にという名の下、駅やカフェで、時には頼みもしないのに郵便受けにまでポスティングされるフリーペーパー。無料なだけに読者にとってその存在はとても軽い。ほとんどのものはすぐにゴミ箱行きだろう。しかし、なかには思いが詰まった重いフリーペーパーもある。誌面がどれだけ自由な記事であふれているか？ ゴミ箱へ捨てる前に、そんな目線であらためてフリーペーパーを読み直してほしい。記事の奥に隠れた、作り手が本当に伝えたい情報に気付くことができるかもしれない。

# Character's shape is free

## 哲学やアイディア、思いを彩るタイプフェイスの自由な形態

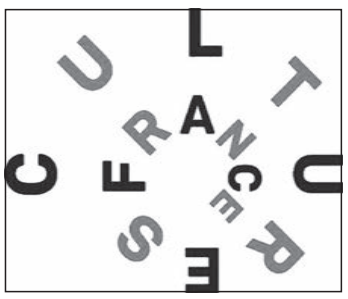
text:大隅祐輔（TOKYO DESIGN FLOW）

文字。それは人間のみが持ちうる特権、最古の記号であり、ある意味で最強のコミュニケーションツールだと思います。誰かに思いを伝えるとき、誰しもが自分自身の手で描いた文章を紙に書き、手渡ししたいと思うはず。渡した本人、もらった相手の双方ともに喜びは大きいでしょう。

各人が異なる形状の体型を持つのと同等のレベルで、異なった形体の文字を描きます。そう考えると字の上手／下手という区分は曖昧で、その問題は単にタイプフェイスに近い／遠いの問題にさえ思えてきます。しかし、上手／下手の問題を解消させるきっかけとして、使用する紙やペンなどが、重要なツールとして機能しています。誰しもが思いを伝える、コミュニケーションを取るためにそれらを自由に組み合わせることができます。

コンピュータグラフィックスの発達で、多くのフォントがソフトウェア内に同封され、いかようにも真っ白い紙のようなブラウザをコントロールすることができ、選択の自由を持つことができました。あらゆるグラフィックデザイナーが執拗に言うことが、文字／タイプフェイスのもつ力強さ。それらに対する興味、愛情です。

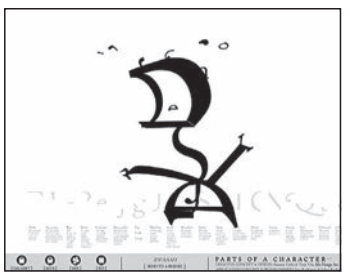
「CultureFrance」のロゴで知られるPhilippe Apeloigは「コンピュータから印刷したものを確信が得れるまで、切り貼りや色替えを繰り返し咀嚼し続ける。そういったフォルムの操作をし、オリジナリティを生むことがグラフィックデザイナーの持つ特権だと思う」と述べています。彼は特に「Akkurat」という比較的最近リリースされた至極シンプルなフォントを使い、遊び心のあるグラフィックを展開しています。「LINETO」というウェブサイトでは、フォント好きにはたまらない最新のフォントが頻繁にリリースされています。Akkuratもここからリリーズされているものです。




文字であるという認識をくすぐるかのような自由なデザインが求められ、コミュニケーションにおいて主要な手段であり、パーツでもあるタイポグラフィを用いることによって製品、ポスター、DMに強烈な独自性をもたらし、それらの哲学やアイディアさえ表現できるのが文字／タイプフェイスの面白さだと思います。

これは余談ですが、文字を使用した「Type is Art」というインタラクティヴなウェブサイトがあります。これは文字のパーツのみを組み合わせ、自由に造形できるウェブサイトです。前述のような文字を自由に使用した新たな試みがさまざまな展開をみせる時代の象徴的なものだと思います。意外と遊んでみるとハマってしまいます……。

しかし、文字の利用という点において、先に紹介したPhilippe ApeloigやJosef Muller-Brockmann、Armin Hofmannなどのスイスから始まるグリッドを活かしたグラフィックの潮流は決して忘れ去られたわけではなく、ツールとしての役割を果たすという制約を抱えたシンプルかつ清潔なデザインが世のスタンダードとなっていく可能性を秘めていると思います。



「LINETO」
http://www.lineto.com/
「Type is Art」
http://www.typeisart.com/

# Uniform Free

text:大澤萌子（TOKYO DESIGN FLOW）

私の通っていた高校は、公立高校では珍しく制服がなかった。制服だけじゃなく校則すらなかった。それは私が入学する40年前に、当時の生徒たちが“自由”をもとめて起こした学生運動がきっかけだった。

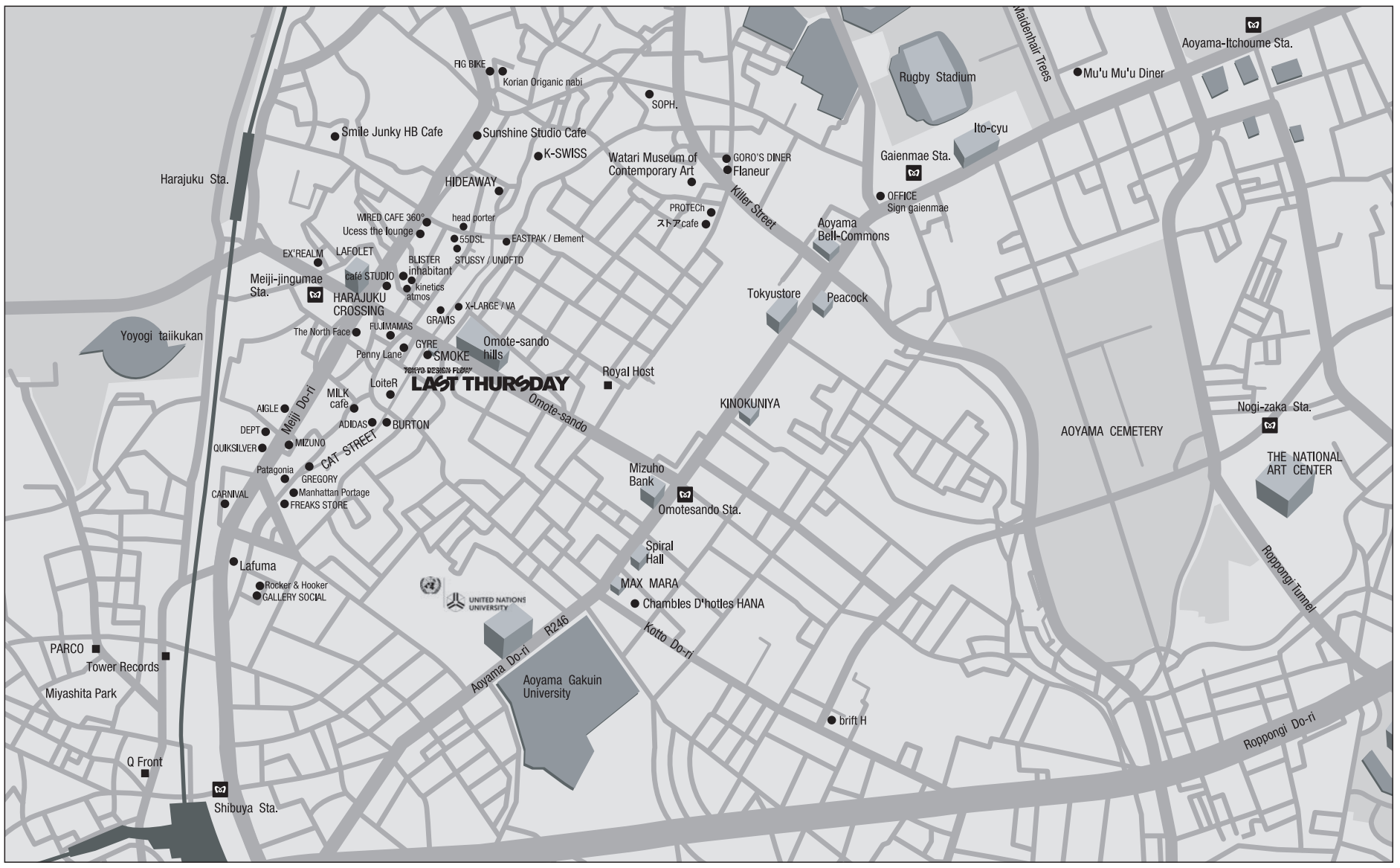
理由は軍服からの延長線からできた詰襟の男子学生服などは廃止されるべきだと運動を起こした。その頃は反戦運動が盛んな時期でもあった。なぜ軍服を着なくてはならないのか。どうしてみんな同じじゃなくてはならないのか。そんなことを彼らは問いたそうだ。

今となっては制服を設ける重要な目的は、きっと組織内部の人間と外部の人間を明確に区別できるようにすることであるのだろう。また同じ制服を着ている者同士の連帯感を強めたり、自尊心や規律あるいは忠誠心を高める効果が期待される場合もあるのだろう。そんな制服を着ることでできる一体感、どこかに属しているというシンボル。そんなものを当時の彼らは「くそくらえだ」と言った、“自由”がほしいと。

たしかに、私のまわりにいた制服を着ていた高校生たちはいかに規則を破るか、いかにハデに着飾るかをいつも考えていた。そしてそれを個性だと言い張った。しかし、私の高校ではどんな格好をしてこようと、誰も何も言わなかった。「したい格好を、したいだけやればいいじゃない、それがあなたという“人間”を表すなら」。そうやって3年間を過ごした。その時、決まったルールがないなかで、いかに自分を表現するのか。“自由”といっても意外と大変だった。だって自分がその団体の中で埋もれてしまいそうだったから。“私”という自分をどんな格好で、どんな形で表現していくのか、毎日鏡と向かい合って考え続けた。

“自由＝なんでもしていい”ではない。やっぱりそこには常識とかがあって、でも案外それは寛容で、そのくせ自分でここまでかな、なんて線引きして。15歳の人間には難しい課題だった。自由といってもそれなりの労力やお金の痛みは伴った。

制服もなく、自由な校風を自慢していた高校。しかし形だけの自由ではなく押しつけられた自由でもなく、自ら選んだ自由と責任で過ごした3年間に、ありきたりのシンボルなんて必要もなかった。




●：TOKYO DESIGN FLOW paper 設置店舗

# TOKYO DESIGN FLOW SUPPORTER'S LIST

下記店舗にてTOKYO DESIGN FLOW paperを入手できます。

■表参道・原宿エリア
HIDEAWAY/SMOKE BAR&GRILL/
Sunshine Studio/MuuMuuDiner/
Smile Junky HB Café/Café Studio/
MiLK café/LoiteR/GRAVIS/
Ucess the lounge/FUJIMAMAS/
WIRED CAFE 360°/head porter/
Burton/55DSL TOKYO/DEPT/
K-SWISS/inhabitant/UNDFTD/
STUSSY Harajuku Chapt/
Patagonia/AIGLE/MIZUNO/
The North Face /EASTPAK/
Lafuma/TOKYO HIPSTERS CLUB/
QUIKSILVER Flagship Store 原宿/
element/kinetics/atmos/X-LARGE/
VA/SOPH./BLISTER/
Rocker & Hooker/FREAKS
STORE/GALLERY SOCIAL/
W-BASE/
Manhattan Portage TOKYO/
GREGORY Tokyo Store/ADIDAS
ORIGINALS SHOP HARAJUKU/
CARNIVAL/FIG BIKE/Top to Top/
FTC/X-girl

■渋谷エリア
SEXON SUPER PEACE/
SPBS/SLOW JAM

■外苑前エリア
Flaneur CAFE/GORO'S DINER/
ストアcafe/Sign gaienmae/
OFFICE/PROTECh/MuuMuuDiner
■青山エリア
briftH/Chambres D'hotes HANA

■代官山エリア
Sign daikanyama/FRAMES/
styles代官山/STITCH TOKYO/
Supreme/SILAS & MARIA/
UNIT/bonjoure records

■六本木エリア
SuperDeluxe

■三宿エリア
ナリワイ 下馬土間の家/H TOKYO/
IID世田谷ものづくり学校

■代田橋エリア
Chubby

■五反田エリア
GOTANDA SONIC

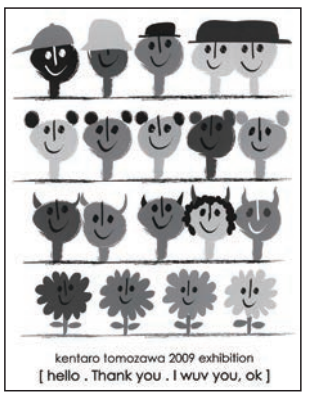
■浜田山エリア
狸サイクル

## SUPPORTER'S NEWS

**Chambres D'hotes HANA**
**Viva La Fruits**

5/17(Sun)OPEN 17:00
START 17:30 / CLOSE 23:00
会場:Chambres D'hotes HANA
フルーツが主役の感じたことのない空間へ・・・目で楽しみ、香りに酔いしれ、舌で味わう! エントランス料金¥1000 でフルーツ食べ放題です。

**Sunshine Studio**
4/21～5/10
kentaro tomozawa 2009 exhibition




**配布店舗募集** 我々の考え方に共感し、『TOKYO DESIGN FLOW paper』を応援してくださる店舗様を募集中です。興味のある方はinfo@tokyodesignflow.comまでお問い合わせください。

**ネット販売** 雑誌のオンライン書店「Fujisan.co.jp」にて『TOKYO DESIGN FLOW paper』をお買い求め頂けます。http://www.fujisan.co.jp/magazine/1281683108

**定期購読のお申し込み** 現在定期購読の準備をしています。最新情報は右記サイトをご覧下さい。 http://www.tokyodesignflow.com/paper/

TOKYO DESIGN FLOW

# WE ARE LOOKING FOR...

## Situationist
都市に状況を創ることに興味が在る人、現代の革命家を探しています。政治や経済よりもスポーツや文化で社会に新しい状況を創ろう。

## Newser, Writer, Executive Contributer, Editor.
携帯電話一つで社会を斬る新しいニュース記者を求めています。ウェブ上に投稿するNewser、読者の評価で印刷媒体(Tokyo design Flow等)のWriterへ、そして文章の力で人々を動かす事のできるExecutive Contributor、そしてメディアサーフ ジョミュニケーションズの新しい情報事業の編集を進めるEditor を募集しています。

## Web Creator
トウキョウのデザインの流れを伝えるメディアとしての機能を果たすTOKYO DESIGN FLOWのウェブサイトを一緒に作り上げてくれる方を募集しています。アイディアとセンスで既成概念を越えていく「Web Creator」をお待ちしています。

## Movie Creater
WE-TVは「Whole Earth」の頭文字からなり、モットーである「we are the televisions.」が示すように、自ら求めるメディアの在り方を発案、制作、放送までを行う、まったく新しいインターネットTV事業です。WE-TVにて独創的なコンテンツ、新しい情報の発信者となる「Movie Creator」を募集します。

詳しくは **info@tokyodesignflow.com** へお問い合わせ下さい。

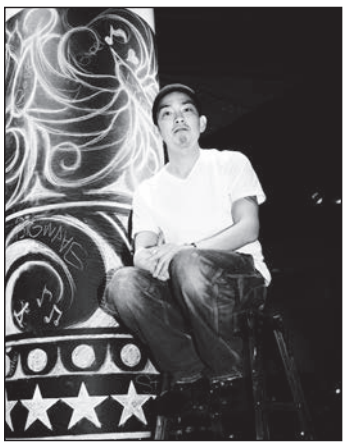
# LAST THURSDAY 3.26 2009 REPORT

## URBAN ART NIGHT

text: 大隅祐輔(TOKYO DESIGN FLOW)

都市におけるアート（Urban Art）とは果たしてどういったものだろうか？現在、アートという高貴な一時代の潮流がもはや死語になってしまったかのように生温い扱いを受けている。インターネットの興隆で誰もが居場所を探すわけでもなく、電波上を飛び回り2次元でしか成り立たないコミュニティに満足している。モノの価値さえ曖昧で、どんな状況であっても地に足が着いた気がしない。もはやこの世には本当に安心できる“場所”はないのだろうか？3月26日に行われたLAST THURSDAY「so what?」。今回は4人のアーティスト（sense、mako、渋谷忠臣、山尾光平 a.k.a. BAKIBAKI）によるライブペインティングという、その場でしか体感できない価値と時間と空間を約250人が共有し、一夜の共同体を作り上げた。非常に価値のあるこの夜の体験は決して高貴なアートの価値に劣らない。アートや表現といったものの価値をアーバンアートによって再認識させられた夜だった。LONDON NITEを主催する大貫憲章氏を中心としたさまざまな音楽によってさらに彩りを増し、Night Pedal Cruisingにも多くの人が参加し、コミュニティをどんどんと拡大し勢力を増していく。もう少しで満開の夜桜がその盛り上がりをさらに魅力的にしていた。

坂巻善徳 a.k.a. sense
1971年12月生まれ。美術家、音楽家、有限会社senseseeds代表。スノーボードライダー、トラックメーカー、バンドギタリストなどを経て2002年の初個展から美術家としての活動を開始。美術作家、ライブペインターとしての活動を軸に、広告、店舗内壁画、イラストレーション、クロージングデザイン、CDジャケット：プロダクトアートディレクションなど、様々な分野で多数の作品を世界に送り出し続けている。音楽家としては、dubsensemaniaのオリジナルメンバーとして活動後、CM、スケートボードビデオ、などに音楽を提供。現在はソロ活動の他にemotional beatsバンド：slow driveでギター、プロデュースを担当。



mako（HATOS）
1977年7月21日生まれ。埼玉県出身。幼少の頃より、絵を描く事が大好きで、15歳の時に初めてNEW YORKのSTREET ARTに触れる。1999年（当時20歳）には現在のスタイルを確立すべく単身NEW YORK、VANCOUVERへ渡り、2002年にはVancouverにて初の個展を行なう。現在、「THE NORTH FACE」とのコラボレーションや「LARK」のコマーシャルワークをはじめ、台湾でのライブペインティングなど国内外を問わず活動しているが、日々自身のスタイルを追及し、狭い世界に閉じこもらぬよう、勉強して、見て、感じて、すべての人、物とのコミュニケーションを心がけて作品作りを行なっている。

山尾光平 a.k.a. BAKIBAKI
画家。1978年、大阪生まれ／東京在住。2001年京都にてライブペイントデュオ"DOPPEL"を結成し、アンダーグラウンドクラブシーンから、NIKEやTOYOTA等、様々な企業とのコラボレーションを果たす。通称"バキバキ"と呼ばれるミニマルな直線が織り成す世界を軸に、2007年の東京・京都での個展にてソロアーティストとしての活動を本格的にスタート。伝統的な屏風とのセッションやアイドルをモチーフにした美人画、"欲望鎌足(よくぼうのかまたり)"なるキャラクターカードなど、日本の大衆文化／サブカルチャーを源に独自の視点で多角的な表現を試みる。

TADAOMI SHIBUYA
アーティスト／イラストレーター／デザイナー。2007年、ロンドンでのBECK'Sのビルボード広告、2008年、GIVENCHYの春夏コレクションにエンブレムデザインを提供する。またTHE ROLLIING STONES、THE NORTH FACEとのコラボTシャツ、P-ZIMAロゴなどその活動は多岐にのぼる。55DSL TOKYO、hpgrp Gallery 東京での個展のほか、Two Faced (UK)、Scope Art Fairなど海外の展示にも多数参加している。
HP: www.myspace.com/tadaomishibuya

**NEXT LAST THURSDAY >>> 5.28 2009**

# Swedish Style Forever Foundation

Swedish Style in Tokyo は1999年のスタートから今年で10周年を迎えます。スウェーデンの現代文化に対する関心のなかから生まれ、多くのスウェーデンアーティストたちが自国の最新ファッション、フィルム、写真、デザイン、アート、音楽や食べ物について情報を分かち合うために東京に訪れました。スウェーデンのコンテンポラリーデザインとライフスタイルをプロモートし、日本とスウェーデン両国間の絆をもっと深めていこうとしています。

今年のテーマは”Swedsh Love Story”今年もたくさんのイベントやインスタレーションが行われ、さまざまなアーティストがスウェーデンの魅力を東京で展示します。このSwedish Style in Tokyoを成功させるために「Swedish Style Forever Foundation」を立ち上げました。非直線的で創造的な考えを持つアーティストやデザイナーはアーバンライフで極めて重要な役割を担っています。私たちTokyo Design Flow も東京のオリジナルデザインを伝えていきます。

SWEDISH STYLE：http://www.swedish-style.se/
Swedish Style Forever Foundation：http://www.tokyodesignflow.com/swedish/

SWEDISH STYLE:

## AFTER WORDS

実は今号で本誌は10号目になります。毎月いろんな方の協力で創ることができています。この場を借りて感謝申し上げます。今号のテーマは「自由」。一体「自由」って何なのか。結局作っている最中も今もわかりません。でも、自由と不自由は必ずしも対立するものではなく、自由は不自由を包むものである、ということは改めて思いました。不自由なんてモノは見渡せば本当にたくさんあります。その前提に立てば、自由に必要なのは純粋な夢や希望で、不自由にぶち当たった時の拠り所となるものなんじゃないでしょうか。いやだから避けるのではなく、したいことや向かうべき場所があるから乗り越える。そんなこんなで、煙草を吸いながら、深夜のオフィスで一人原稿を書いている、この瞬間も僕にとっては「自由」になるんだろうな、と。そう思いました。

『TOKYO DESIGN FLOW paper』
編集長　堀江大祐

Answers Lee's Choice

# おもしろき　こともなき世を　おもしろく

text：Alexander Lee Chang

お葬式ってなんで暗いのかな？ 黒なのかな？ 静かなのかな？ そんな疑問がある。幕末の名士、高杉晋作のお葬式は彼自身がパーティ好きだったので彼が喜ぶと皆が想い、お葬式が号泣でのどんちゃん騒ぎのパーティだったという話がありました。自分たちは悲しいけど、なくなった人は悲しかったのか？（そういう人もいます）悲しくしてほしいのか？ もっとしてほしいことがあるのではないのかな？ って思います。

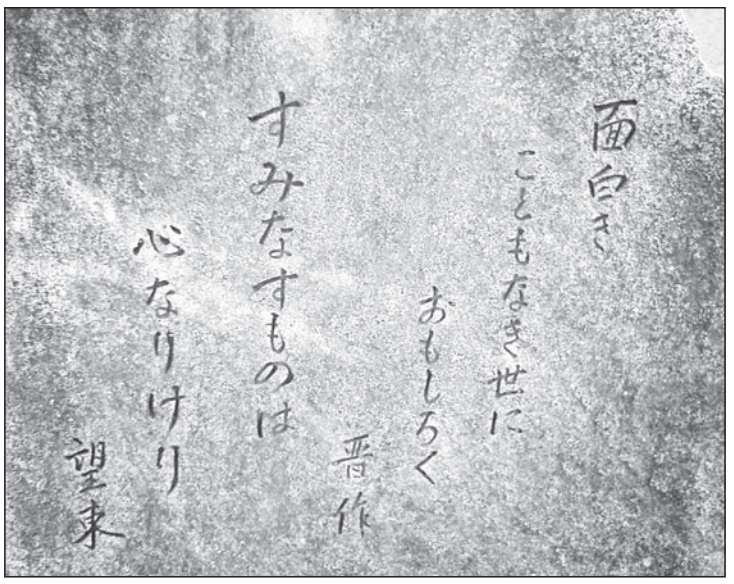
僕はスケートボードの世界、ストリートの世界で育ってきました。どういう世界かというと、固定観念に収まらず、いいものはいい！ あれとこれを混ぜても自分が格好いいと思えば良い！ 古いルールなんて中指立てる。そういう、自由な世界です。僕はそういう自由世界は大好きです。

しかし、古いルールってどんなルール!? 知ってるかなおれ!? ん～知ってることもある。やってたかな？　やられたかな!? ん～やったこと、あることもある。やられたこと、あることもある。でも知らないこともある。やって無いこと、やられて無いことも沢山ある。

自由の反対語「束縛」、そう束縛されたから自由になりたいのである。反骨精神かな？ さらに僕は、自由＝遊びって思ったりもする。そのルールを知りつつルールに則らず、遊んでしまい、その遊び自体を新しいルールとして認めさせてしまうとか。これ最高に幸せ！

僕自身、30を過ぎて、ある程度経験を積んだ大人です。若い頃は沢山の大人たちにアレしては駄目、これしては駄目、そんなダメ駄目祭りの世界でした。そんな世界に嫌気がさし、反骨精神で自由に行動してきた。でも、もう十分「反骨自由」はやったので、今度は「自遊」なことを沢山やっていきたいと思います。だって、もうなかなか人から、あれは駄目これは駄目って言われないからね!? 大人になるとね。ある意味反骨できないのです。

だから、自分で今まであるルールをもっと遊んでやろう！ 新しいルールを作っちゃおう！ って思ってます。その為には僕たちが社会を世界をまず納得させて、良い、格好いいと思わせる事が一番最初にすること、それは日本人が昔から持っている「粋」という精神だ！ だから僕たちの血にはそれが伝承されているし、できるんだ！ 例えば、高杉晋作の有名な詩「おもしろき　こともなき世を　おもしろく」この言葉最高です。東京がもっともっとオモロい土地になるように僕自身もオモロくなるようにもっと頑張ろ！




アレクサンダー・リー・チャン
1975年サンフランシスコ生まれ。アパレルデザイナー／プロスケーター／アーティスト。幼少期のカリフォルニアにてスケボーと出会う。10代の頃からプロスケーターとして活躍。96年より7年の間、アパレルブランドのディレクターを経て、03年独立し[Chang Co., Ltd. ]を設立。04年S/Sよりスタートした[AlexanderLeeChang]ではアーティストとしても活動する彼のDIY精神で凝ったディテールと構築的なフォルムのプロダクトを生み出している。立体作品、コンピューターグラフィックなどが得意。

# 東京朝市・アースデイマーケット

text: 田中佑資（TOKYO DESIGN FLOW）

モノを買うってどういうことだろう。欲しいものが手に入るのは嬉しい。でも、せっかくの買い物なのに、自分だけ満足するのもなんだか。せっかくだから、売る側も買う側も、気持ちよく「ありがとう!」と言える関係がいい。都市での生活は効率重視・機能重視で、なかなかそんな買い物はできないけれど、実は4年前から、“そういう関係”を実現している場所があります。　代々木公園で行われている“東京朝市・アースデイマーケット”。皆さんご存知でしたか?

月に一度、関東近郊の農家さんが、自慢の作物をもって代々木公園に集まります。店先に並ぶのは、無農薬（減農薬）・無化成肥料でつくった取れたての野菜たち。農家さんの野菜だけでなく、フェアトレードの雑貨や自然素材でつくった日用品なども販売されています。毎回40～50店舗参加するマーケットは多くの人でにぎわいとても賑やかです。

TOKYO DESIGN FLOWでもFarmer's

Marketを開催していますが、今後も運営に関するノウハウや出店農家さんの、こういった活動に興味のあるボランティアの交流などを通じて、原宿・表参道近辺の日常にファーマーズマーケットを根付かせ、農的生活のタネをまいていきたいと考えています。

東京朝市・アースデイマーケット、まだ行かれてない方は、ぜひ出かけてみてください。

東京朝市・アースデイマーケット
毎月第3日曜日、代々木公園けやき並木にて開催中。オーガニックの農産物から、その場で食べれる自然食品、フェアトレード製品や雑貨などが集まります。代々木公園のほか、江東区などでも定期的に開催。運営を手伝ってくれるボランティアも募集中です。
www.earthdaymarket.com

【今後の開催日程】
5月24日（日）
6月21日（日）
7月19日（日）
＊各回10時から16時（雨天決行）

# FREE AS A BIRD.

text：MAT.（Media Surf Communications inc.）

鳥のように自由に。例えば夏の晴れた日、海辺で本を読んでいるときにふと目に入る大空を自由に飛び回るかもめの姿。誰もが一度は自分がかもめのように自由に大空を舞う姿を想像したことがあるのではないだろうか。

ビートルズの曲で「FREE AS A BIRD」というものがある。 ジョン・レノンが70年代後半にレコーディングしていたデモテープを残りのメンバーが95年に完成させたものだ。 この曲に関してポール・マッカートニー、リンゴ・スターとジョージ・ハリスンでレコーディングをおこなっているときに感傷的にならないよう「ジョンは早々と自身のパートを終わらせ、あとは頼むよと言って休暇にでてしまった」というふうに考えるようにしていた、というポールのコメントはあまりにも有名だ。 プロデューサーがジョージ・マーティンでなかったり、いろいろとファンからは賛否両論あるようだが、 この曲発表当時中学生だった僕にとってはリアルにビートルズの新曲を（当時好きだった子から借りて）聴くということだけで感動したものだった。

いま、僕らは交通手段と情報網のめざましい発達の産物として物理的な自由は手に入れた。 お金と時間さえあれば、どこにでも行ける。ただ、そのぶんあふれんばかりの情報ばかりが先行して、また、普通であることからはずれることを恐れ、いろいろな制約を自分で作ってしまい、それらが足枷になってしまい、精神的に自由に飛び回ることができなくなってしまっているのではないか（と強く自分に問うてみる）。

チャップリンは映画「ライムライト」の中でこう言っていた。「人生には、勇気と想像力、それとほんの少しのお金があればいい」と。本当はもう既に僕らは「自由」で、ただそれに気づいていないだけなのかもしれない。

# 今一度、原点回帰。

**1966年に誕生し、今もそのベーシックなデザインと何にでも合わせることができる使いやすさで人気のK-SWISS。**
**今回は原宿にあるK･SWISS FALGSHIP SHOP HARAJUKUにお邪魔し、東京という街について、ブランドについて、興味深い話を伺ってきました！**

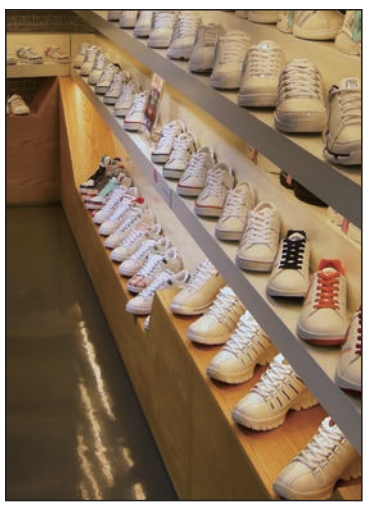
text & interview: TOKYO DESIGN FLOW

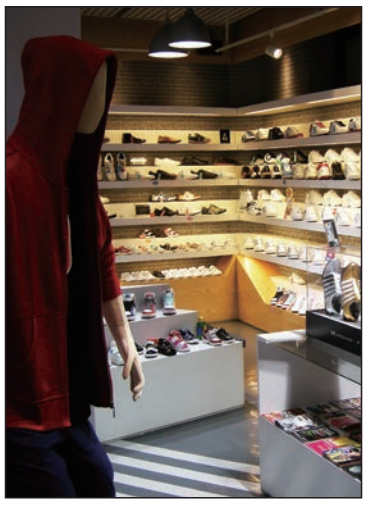
サブマネージャーの作山さんに聞いたところ、今年からより「スポーツ」に軸足を置いていくそう。もともとテニスシューズとして生まれたK･SWISS。作山さんも「やはり、K･SWISSのアイデンティティはテニス」とのこと。当時そのシューズは画期的で、多くのプレーヤーに支持されたとか。そのオリジナリティを尊重し、原点回帰の意味もこめてテニスやランニングなどのスポーツをテーマに今後ブランドを展開していくそう。

確かに！お店のディスプレイもテニスカラー満載です。こういった展開を待っていたファンも多いのではないでしょうか。そんでもって、SHOPのレジの背面も、ディスプレイの窓枠も人工芝。早速そこを「やはりテニスを体現するために最近変えたのですね!? サスガ!」と自信満々につっこむと、「これは、もとからです。やはりアイデンティティですから……」とのお答え。そうだよねー! さっき言ってたじゃん。バカな僕。

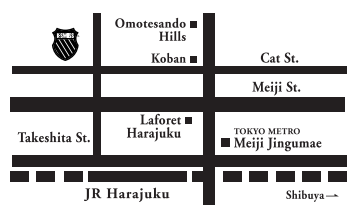
また、原宿という場所について聞いてみると、「独特なカルチャーを形成しているこの場所でブランドの方向性と来られるお客さんとのバランスをうまくとって、色々なものを見せていきたい」とのことです。スポーツを軸足に置きつつ、ぜひTOKYO DESIGN FLOWと面白いことをやっていきしょう！

今後もいろいろと面白いことがここらへんから起きていきそうな予感。東京のユースカルチャーの発信地で、「原点回帰」というテーマのもと、独自の目線で展開をしていくK･SWISS。これからも目が離せません！





多彩な商品を扱うFLAGSHIP SHOP




K･SWISS
1966年、2人のスイス人によって産み出された世界最初のオールレザー製テニスシューズが『K･SWISS』の歴史の始まり。1960年代初頭、Art & Ernie Brunner兄弟が、スイスから南カリフォルニアに移住。当時はキャンバス製テニスシューズしかなく、その品質に不満を感じた兄弟は、自ら高品質のテニスシューズを作り出す事を決意。

# 農的生活のタネをまく Farmer's Market@GYRE

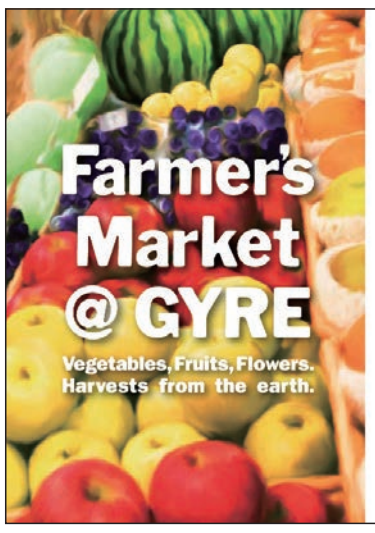
昨年11月から毎月開催してきたTOKYO DESIGN FLOW主催のFarmer's Market@GYRE。好評をいただいているおかげで、5月からは月2回開催できることになりました。有機野菜、旬の果物、植物に野菜の苗やお花など、自然の恵みがデザインでつながるコミュニケーションの場が原宿・表参道の日常に息づいていくよう、ますますがんばっていきたいと思います。

回数拡大に伴い、企画・運営に携わってくれるスタッフを募集中です！「都市にクリエイティブな農的生活のタネをまく」ことに関心のある方は、farmersmarket@tokyodesignflow.com（田中）までご連絡ください。一緒に、まずできるところからはじめましょう。

【今後の開催日程】

5/2（土）3（日）
5/30（土）31（日）
6/13（土）14（日）
6/27（土）28（日）
＊各回11時から17時（雨天決行）

イベント詳細：
http://www.tokyodesignflow.com/event/fm.html




表参道GYREの地下で
マーケットを開催！
有機野菜、季節の果物、
色とりどりの花木、自然の恵みが
畑直送でそろいます。
普段とは一味も二味も違った
買い物（コミュニケーション）を
GYREにてお楽しみください。

日 時：5/2(sat),5/3(sun) 11:00-17:00
5/30(sat),5/31(sun)
場 所：GYRE B1F（4Fレストランでも特別メニュー提供）
主 催：TOKYO DESIGN FLOW 協 賛：GYRE
www.tokyodesignflow.com/event/fm.html

# Creators at Work (Creator's flow)

text: 長谷川守（TOKYO DESIGN FLOW）

グローバリズムという言葉に懐かしさを感じる。世界はいよいよ境界を失い、海を飛びこえて旅するなんてすっかり当り前になってしまった。そうした意識の変化がもたらすものは自由主義なんて大まかな括りではとても掴みきれない。ビジネスについて言えば、多角経営などの1つの分野に縛られない柔軟な対応力が求められて来ているようだ。それはエンジニアやクリエーターといった専門分野も例外ではない。

千代田区三番町にあるシェアオフィスco-lab（コーラボ）、クリエーターやアーティストが多数入居するこのビルに拠点を構える島村卓実さんはそんなボーダレスなプロダクトデザイナーだ。もともと自動車メーカースバルでレガシーなどの旗艦モデルを手がけていた島村さんだが4年前に独立し、携帯端末から家具、店舗内装に至るまで様々なデザインを手がけてきた。展示会フリークと自称するのは海外のデザインイベントなどに出展して度々注目を集めてきた「monacca」という木製かばんが強く印象に残っているところからも納得できる。

足掛け4年。デザインはもとよりその製作過程において例えば、自ら工業ミシンを改良して木材を縫製できるようにしたり、事務的なプレスワークに至るまで一貫したプロセスすべてに携わったという。海外イベントなどにも積極的に参加することで世界的に注目を集めた。クリエーターが望む自由な創作環境とは何役もの仕事をこなすことができて初めて得られるものなのだろう。現在はガーデニンググッズや紙を利用したどこか日本的でエコライクなプロダクトに取り組んでいる。

TAKUMI SHIMAMURA
インダストリアルデザイナー。カーデザイン、バスや乗車型モアなどのトランスポーテーション・デザイン、小規模住宅やインテリア、ファニチャー、プロダクトデザイン開発に携わる。主なデザインにドコモ携帯端末機『ポケットボード』シリーズ、『パクティ』、『カラーブラウザーボード』、はとバス新型デザイン車両『はとまるくん』、土屋機械『ロボットモア』、小学館『ラビタ』と共同開発で家具と車の特別仕様車『アティバル』、簡易移動型隠れ家『キャバナ』のデザイン開発。Gマーク中小企業庁長官特別賞受賞、他Gマーク受賞歴多数。www.t-shima.com

©mako

# LIBERTY IN THE CITY

人類の夢は空を飛ぶ事だった。全てから解放されて自由に空を飛ぶ事。
好きなところに、好きな時に、好きな人と行く事が自由。
Libertyとは積極的な自由ーLibertasー
どこにでも絵を描く自由、どこにでも行ける自由、どこでも歌える自由。
好きなことをして働ける自由。どんな人とも平等に話す自由。
誰でも愛してもいい自由。

MONTHLY EVENT TOKYO DESIGN FLOW

# LAST THURSDAY

ART, FASHION, FOOD, TRAVEL, SPORTS, MUSIC and DESIGN.

## 28 MAY 2009

www.tokyodesignflow.com